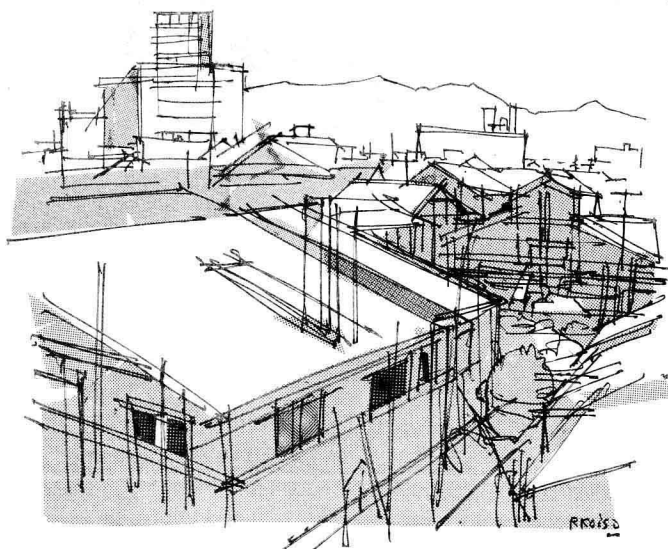


積木の箱

三浦綾子

積木の箱

三浦綾子



朝日新聞社

積木の箱

定 価 420 円

発行日 昭和 43 年 5 月 25 日 第 1 刷

昭和 43 年 11 月 20 日 第 12 刷

著 者 三 浦 綾 子

発行者 朝日新聞社 大 田 信 男

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 東京 北 九 州
大阪 名 古 屋 朝 日 新 聞 社

© 1968 三浦綾子

目
次

坂道	7
正門	16
鍵	23
大垣夫人	33
夕風	41
暗い部屋	53
くもり日	60
綿アメ	84
視線	95
木洩れ陽	103
丘の夜	115
アリの巣	121

羽虫	131
犬の声	145
ドライヤー	153
草の上	159
入道雲	170
乱反射	187
地獄谷	205
風鈴	213
砂湯	223
断面図	250
鉄柵	260
ロッカー	269

映像	287
挑戦	299
小路	306
ソファ	315
発車	321
動く壁	338
炎	356
こだま	372
黒いドア	380
終章	386

さしえ・装幀 小磯良平

積木の箱

坂 道

Sの字に曲った長い坂だ。かたわらの熊笹が、風にさやさやと鳴った。五月の朝の陽に、笹の葉がひとところ刃物のようにきらりと光る。

杉浦悠二は、まだ足に馴れない靴を気にしながら、乾いた坂道をのぼって行った。まだ七時半で、人通りはまばらである。オバQがパンを食べている絵のついた、水色のバン屋の自動車が、悠二とすれちがって、たちまち坂下に遠くへ行つた。

なだらかな丘の上に、ぼっかりと白い雲が浮んでいる。この丘は、旧陸軍の演習場で、春光台と呼ばれている。約六百ヘクタールの広い丘だ。ここには、きょうから杉浦悠二が勤める私立北栄中学をはじめ、五つほどの学校が遠く近くに点在し、アパート団地や住宅が増えつつあった。

坂をのぼりきつた右手に、大きな石の鳥居があった。境内の深い木立は、黄や緑の新芽が、けぶるように芽吹き、五分咲の桜が何本か初々しかった。片隅の小さなほこらの

朱が、あざやかに悠二の目を射た。

鳥居の向い側に、「お休み所」と書いた小さな店がある。その隣にたばこの赤い看板が出ている、小ぎれいな二階建の店があった。悠二は、たばこが切れているのに気づいて店に入った。

間口四間、奥行三間ほどの清潔な店だ。アイスキャンデーの白いボックスが二つ、朝の陽を反射しており、牛乳ビンがたくさん大きなショー冷蔵庫の中に、ずらりと並んでいる。アンパンやミルクパンが、山のようにショーケースの上に置かれたまま、人影はない。

「ごめんください」

奥に向つて、悠二は大きい声で呼んだ。すると、冷蔵庫のかけから、

「まあ、どなた。大きな声ね」

歯切れよく答えながら、ひよいと顔を出したのは、切れ長の黒い目が明るく笑っている二十三、四の女性だった。

「あら、ごめんなさい。いつもの生徒たちかと思つたものですから……」

グリーンのブラウスに、紺の半てんをひっかけたその女性には、ちょっと首をすくめた。感じはいいが、どこか勝負気な人だと悠二は思つた。

「でも、やっぱり少し大きな声ですね。いい声ですけれど

「……」

そう言った時、ひとりの少年が、のっそりと店に入ってきた。

「一郎さん、けさもごはんに合わなかったの」

若い女性は明るく声をかけたが、少年は黙ってパンと牛乳をとり、金を置いて出て行った。眉の濃い賢いそうな、しかし暗い感じの少年だと思いつながら、悠二はハイライトをひとつ買った。

「あれが朝飯ですか」

パンと牛乳をかかえた少年のうしろ姿を見おくりながら、杉浦悠二はたばこに火をつけた。

「ええ……」

何かいおうとしたが、若い女は思いなおしたように口をつぐんだ。

「いらっしやいませ」

店と居間の境の玉のれんをかきわけるようにして、白いかっぱを着て、和服姿の女が出て来た。落ちついた涼やかなまなざしと、しっとりとした肌が印象的である。半てん姿より五つも年上だろうかと思いつながら、悠二は店を出た。

悠二は、毎朝この店でたばこを買おうと思った。する

と、新しい学校に、学期なかばで転任したおっくうさがなくなつたような気がした。若い女の少しきかん気の顔立ちも、涼しい瞳の女も、それぞれに美しいと、悠二は旭川の街を眺めた。この丘の下から、かなり遠くまで旭川の街が広がっている。上川盆地を囲む山の起伏が紫にかすんでいた。

「八時半に新任式がはじまりますから……」

といった昨夜の磯部校長の言葉を思い出しながら、悠二は神社の境内に入つて行った。

赤いほころの前に腰をおろして、先ほどの少年がパンを食べていた。悠二は立ちどまって少年を見た。

（中学三年か、それとも高校生かな）

少年はうつむいたまま、黙々としてパンをかじっている。それは食べかじりの少年の食べ方ではない。まるで木片でもかじっているような、味気ない、いくぶん投げやりな食べ方であった。悠二は、少年の方にぶらぶら歩いて行った。櫛（なら）の木の根もとの苔が、朝の光の中にピロロドのようにつややかである。近寄る悠二の姿に、少年はふっと警戒するような表情をみせたが、すぐに無関心な顔になった。

「君、ここはなかなかいい所だね」

「……」



悠二は少年のえりもとに目をやった。悠二が勤める北栄
 中学三年のマークがついている。

「君は、いつもここでパンを食べるの？」

悠二は親しみをこめてたずねたが、少年はちょっと口を
 とがらせて横を向いてしまった。

「やあ、失敬したね」

片手をあげて、悠二は少年の前を去った。悠二の受持は
 三年のはずであった。

古ぼけた本殿の前に、雀が四、五羽餌をあさっている。
 悠二の足音に雀はパッと飛びたつた。

（人間も雀も、どうやらおれを歓迎してはいないようだ）
 悠二は苦笑した。

雑木林の中へゆるくカーブしている細い坂道があった。
 木々が影を落しているその美しさに誘われて、悠二はその
 細道を下りて行った。

「ようし、今度こそ取ってみせるぞ」

幼い男の子の、よくとおる声が出た。

悠二は、白樺やヤチタモの根方をびっしりと敷きつめて
 いる熊笹のつややかな緑を眺めながら、のんきに細い道を
 下って行った。どこかで三光鳥が「ツキ、ヒ、ホシ」と啼
 いている。

「ようし、こんどこそ取ってみせるぞ」

先ほどの幼い男の子の声である。何だろうと、悠二があたりを見まわすと、ひとまたぎできそうな澄んだ小さな流れに、六つくらいの子がどじょうでも追っているらしい。男の子は、悠二が見ていることに気づかない。色の白い、御所人形のような愛らしい子供である。小さな赤い唇をきりりと結んで、流れに足をいれ、前ここみになつて、じっと水面を見ているのが、学芸会に出ているような真剣さだ。一、二歩進んで、日本手拭を水の中にくぐらしたが何も取れない。

再び男の子は水面をじっとにらみつづけている。いや、男の子は水面ではなく水中を見ているのかも知れなかった。

「ようし、こんどこそ取ってみせるぞ」

三度、寸分たがわぬ言葉を男の子がハッキリとくり返した時、その真剣さに悠二は思わず微笑した。

「ようし、こんどこそ取ってみせるぞ」

悠二が大声でいうと、男の子はびっくりしてふりむいた。ふりむいたその目が、また真剣であった。悠二は流れをまたいで、男の子の手拭をとった。

「つめたくないのか、坊主」

「うん、つめたいよ」

ソバの根のように赤くなった自分の足を見ながら、男の

子はニコッと笑った。何とも人なつっこい笑顔である。

悠二は手拭をひろげて、水の中へさつと入れた。たちまち手拭の中にとじょうが二匹入った。

「ワアッ！ うまいんだなあ、小父さん」

男の子は、小さな手を叩いた。

「うん、お前の弟子ぐらいにはなれるだろうな」

悠二は男の子を片手で水の中から抱きあげた。男の子はあらためて悠二を見あげた。背の高いヒゲ剃り跡の青々とした見なれない男である。

「小父さん。案外ハンサムだね」

「ハンサムって知ってるのかい？」

「知ってるよ。敬子先生がね、テレビを見てる時、あの人ハンサムだねっていうもん」

「敬子先生？」

「うん、敬子先生は、ぼくのうちにずうっとせんから、とまっているの」

「ふうん、君は何ていう名前だ？」

「ぼく？ ぼくは川上カズオ。カズは平和の和なんだって」

「平和の和か、なかなかいい名前だね。君のママが教えてくれたの？」

「ぼくにはママがいないの、おかあさんしかいないの」

「ママも、おかあさんも同じだよ」

「ふうん、ほんと？ ママとおかあさんが同じだなんて、ぼくつまらない」

男の子はがっかりしたようにいった。

澄んだ小川の底に、朝の陽がゆらめいている。いま和夫が、

「おかあさんとママが同じなら、つまらない」

といった言葉が、妙に悠二の心に残った。ふとみると、傍の川柳の下に黒いランドセルが置かれている。

「和夫君は一年生か」

「うん、ぼく一年生だよ」

和夫はタンポポの花群に足を投げ出して、赤いソックスをはきながらいった。

「学校に行く前に、いつもどじょうをすくうのか」

「そう、帰りもすくうんだよ」

「道草をしてはいけないって、先生にいわれたろう」

悠二は、自分もここで道草をしていると、苦笑しながらいった。

「いわれるよ。だからぼく、道の草は取ったことはないよ」

和夫はあどけなく答えた。

「あのなあ、和夫君、道草をくうというのは、途中で魚をすくったり、遊んだりすることをいうんだよ」

「ふうん。そしたら魚をすくっても道草なの？ 困ったなあ、ぼく」

和夫はあわててランドセルをひきよせた。とめがねはずれていたのか、逆さになったランドセルの中から、本やノートや画用紙が、タンポポの上に散らばった。

「どれ、その絵を見せてごらん」

悠二の手に、和夫は素直に画用紙を渡した。

「ほう、なかなかおもしろい絵だね。何の絵だろう」

赤や青や黄などの、とりどりの色が太く細く、もつれた糸のように書かれていて、何かにぎやかな、そしてどこかものがなしいような感じがある。

「ほんとは？ 小父さん。それおもしろい」

「ああ、おもしろいとも、だけどこれは何の絵なの？」

「お祭の絵なの」

「お祭の？ なるほどねえ」

いわれてみると、悠二が感じたにぎやかさや、ものがなしさはお祭のふんいきであった。

「ピンクは綿アメ、茶色はツッ焼の匂い。この黄土色はサーカスのおい。それから紫はサーカスの楽隊の音。灰色はオートバイの曲芸の音なの」

和夫は教師に対するようなまじめな顔で、すらすらと答えた。

「ほう、なかなかおもしろいじゃないか」

「でもね小父さん、先生はね、お祭の絵だから人や店やいろいろかきなさいっていうの。困った絵だねえっていうの」

「ふうん」

「友だちも、はんかくさい絵だな。お前、はんかくさいなっていうんだよ」

小首をかしげたその顔が、少し悲しげにくもっていた。

「和夫君がはんかくさいって？。そんなことないよ。なかなかおもしろいんだよ」

ハッキリと断言した悠二を見あげて、和夫は思わずニコッと笑った。

「ほんと？ 小父さん。ぼくはんかくさくない？」

「絶対におもしろいんだよ」

時計をみると、もう八時十分を過ぎている。悠二は和夫の手をひいて小川に沿って歩き出した。どこかで三光鳥の聲が聞えた。

「あの鳥は、何て啼いているか知っているか」

「ううん、知らない」

「あのね、月、日、星って啼いてるんだよ」

和夫は濃い眉を寄せて、鳥の声を聞こうとした。

「ほんとだ。ほんとだね小父さん」

喜んで和夫は、その声を真似た。

「ねえ小父さん」

「何だい」

「ううん、何でもない」

少し行つて再び和夫が呼んだ

「何だい」

「小父さんはもしかしたら、ぼくのおとうさんじゃないの」

「君の？ 君におとうさんはいないのか」

「うん。ずうっとせんに死んだんだって」

「ほう、それは大変だな」

悠二は和夫の御所人形のような顔を眺めて、その小さな手を強く握つてやった。

「小父さんはねえ、きのう札幌から来たばかりなんだよ。」

小父さんにはお嫁さんも子供もいないんだ」

「札幌から？」

ふいに和夫の顔が輝いた。

「札幌といたら……ええと旭川、近文、伊納、神居古潭、納内……」

立てつづけに、和夫は少しのよどみもなく札幌までの駅名をいって、

「そうかい。小父さんは札幌から来たの」

と、ニコリした。思わず立ちどまった悠二は、呆然として和夫の顔をまじまじと見た。母とママが同一であることも知らないこの幼な子が、旭川から札幌までの二十幾つもの駅名を暗記していることは、尋常ではなかった。悠二が何かいおうとした時和夫が言った。

「小父さん、坂の上に行くの？ 多くの学校ずうつと向うの方なんだ。バイバイ」

小さな手が悠二から離れた。

「バイバイ、気をつけていくんだよ」

悠二はまた時計をみた。あと十分ほどある。大丈夫新形式には間にあうと、さっきのぼって行つた坂道を再び歩いて行つた。

「オーイ小父さん」

ややしばらくして、うしろの方から和夫の声がした。

「オーイ」

悠二がふり返ると、百五十メートルほど向うの方で、和夫がビョンビョンと二度ほど飛んでみせた。だが次の瞬間、和夫が崩れるようにその場にしゃがみこんでしまうのが見えた。

ふいにしゃがみこんだ和夫に、悠二は、

「オーイ、どうしたんだ」

と叫んだ。和夫はちょっと顔をあげたが、立上がろうとしない。悠二は時計を見た。このまま真つすぐ学校に行けば、新形式に間にあうはずだ。だが和夫の所まで行つては、何としても遅刻してしまう。杉浦悠二はあたりを見まわした。誰か通りかかるといふ者がいれば、和夫のことを頼めると思った。

「オーイ、どうしたんだ」

再び大声で叫んだが、和夫は立ちあがろうともしない。腹痛か、それとも足でも痛めたのか、遠くからではさっぱりわからない。普通の日ならともかく、きょうは悠二の初出勤で、新形式の日である。

「新形式は八時半からですよ」

念を押した昨夜の磯部校長の顔が目には浮び、整理して自分を待っている全校生徒の様子が悠二の胸をよぎった。だが、思いきって悠二は和夫を目がけて走り出した。自分が遅刻したとしても、誰の命に別条あるわけでもない。しかし、あの幼い和夫が、今あるいは激しい腹痛に襲われているのかも知れなかった。一瞬でもためらった自分の中のエゴイズムに恥じながら、悠二は一心に走った。足に合わな

い靴のせいとか、ひどくおそいような気がした。

「どうしたんだ和夫君！」

やっと和夫のそばに来ると、和夫は眉をしかめてペソをかいている。

「あのね、小父さん、足が痛いのに」

「足が？ どれ、見せてごらん」

見たところ、悠二の目には何の変化もないように見えた。

「どれ、立ってごらん」

両手を持って立たせようとしたが、和夫はたちまちしゃがみこんでしまった。

「どうしたんだろう」

もう悠二は、新任式に遅刻することは致し方がないと腹を決めていた。見ると、和夫の足もとにこぶしほどの石があったらしい跡が、穴になってへこんでいる。

「和夫君、この穴に足を突っこんだんじゃないか？」

「うん、いま小父さんに、サヨナラっていいおうと思ったら、足が痛くなったの」

「そうか、今ビョンビョン飛んだ時、この穴に落ちたのかな。それは悪かったなあ」

悠二は和夫を背負った。

「かわいそうになあ、痛いだろう。君のうちはどう

だ？」

もしかしたら、足の裏の関節が脱臼しているのではないかと思つた。捻挫なら一週間も休めばいいが、脱臼では大変だと悠二は思つた。

「こっち」

悠二の背にほおを押しつけたまま、和夫が指さした方歩いて行つた。

「ああ、小父さん、こっぢゃないよ、あっちだよ。ほくのうち坂の上の店屋なんだ」

二、三町も歩いてから、和夫は背に押しあてていた顔をあげて、驚いたように言つた。

和夫を背負つて、無駄に二、三町も歩いてから、方向がちがうといわれて杉浦悠二はいささかがっかりした。

「坂の上の店屋つて、あのたばこやパンを売っている店かい」

「そうだよ」

「あの神社の向いの店なんだね」

悠二は念を押さずにはいられなかつた。また間違つて歩いていけば、一時間も遅刻してしまわなければならない。

「うん、神社の向いだよ」

いわれて悠二は、ひとゆすり和夫をゆすりあげると大股